

批評・紹介

羽田博士
頌壽記念 東洋史論叢昭和二十五年十一月七日東洋史研究會發行
四六倍版一〇七〇頁 定價 一、五〇〇圓

羽田先生が還暦をお迎へになつたのは、思へば昭和十七年のことであつた。ときはまさに太平洋戦争の第二年目で、先生は京都大學の總長として暴戾なる軍閥と冒昧なる便乗政治家を相手に、大學の尊嚴と學問の自由のために挺身せられてゐたのである。そのときから敗戦の年を間にはさんで、あしかけ十年の歲月が夢のやうに過ぎさつた。さうして本年、先生はますますお元氣で古稀をお迎へになつたのである。本書は實に今から十年前、先生の還暦をお祝ひし、先生の學界における不朽の功績を記念せんがために編纂せられたものであるが、早く組版を了しながら容易に出版の運びにいたらなかつたことについては、いふにいはれぬ事情があつた。戦争末期の混亂、終戦後の虚脱、悪條件はつもりつもつて、この記念冊はいつ日の目を見るときも知れぬ状態におかれてゐたのである。しかし、時は熟してついに昨昭和二十五年十一月、四六倍版、總グロス製、一〇七〇頁といふ巨冊が立派にでき上つた。十一月三日、京都大學人文科學研究所において、

東洋史研究會全國大會の席上、先生をお招きしてこれを贈呈し、關係者一同、多年の宿願を果たしてほつと胸をなでおろしたことである。

さて、わたくしが本書を紹介すべき役に當つたわけであるが、東洋史研究の發行がこれまで同様な事情で遲滞し、さらに一年を経過したいまごろ、これがために一文をものする次第となつた。一體、本書の發行者がわが東洋史研究會であり、わたくしもその執筆者の末席をけがす一人であり、しかもこの出版については深い關係がある以上、これが批評紹介といふことはいさゝか手前味噌の嫌ひがある。内容の一々については、最近出るべき史林第三十五卷第三號に外山軍治氏のくわしい紹介があるさうであるから、それを御覽ねがふこととして、こゝにはたゞ本書の出版されるに至つた事情と體裁とについてのメモを記すにとどめよう。

それは巻頭に附した發行者たる東洋史研究會名義の序のうちにすでに盡されてゐることであるが、一體かくのごとき序を附したといふことが異例で、それは要するに出版が非常に遅れたことに對することわり書きである。それに明記されてゐるやうに、この出版はアメリカのロックフェラー基金會のファーストとハーヴァード大學、ハーヴァード・エンチン・インスティテュートのエリセエフ氏との厚意による、同研究所の物質的な援助がなかつたならばおそらく實現しなかつたであらう。この間の轉旋をされた梅原博士の勞を多とするとともに、羽田先生の世界の東洋學界に對する貢獻と名聲のし

からしめたところであるといまさらのごとく感ぜざるをえない。さうしてアメリカはもとより世界の東洋學界にひろく頒布されるといふ、わたくしどものいままで容易に想像しなかつた好運に恵まれることとなつたのである。もし豫定通り戰爭中に出版されてゐたら、かうした國際的な普及もみず、またこんな立派な本にもならなかつたことだらうと、出版の遅れに遅れたことを不幸中の幸とさへ思ふやうになつた。

そこで那波博士の筆になる先生還暦の壽詞はそのまゝとして、先生の略歴と著作年表にはその後のものを増補して學界の便宜にそなへることとした。たゞ論文についてはすでに紙型ができ上つてゐる關係から、何ら改訂を加へることができず九年前の舊稿の發表となつたのは遺憾である。たゞ本書にとつて從來のものに見られなかつた特色は、上記の事情にかんがみて、各論文の英文レジュメを作成しこれを巻末に附したことである。この困難な仕事は主として藤枝晃氏が當り、あたかも京都大學に赴任してこられた岩村忍氏の献身的な協力によつて完成することができた。かうなればついでに羽田先生の全著作目録を英譯して收録し、先生の業績の全貌を歐米の東洋學界に認識させるのには絶好のチャンスであるといふことになり、出版間際になつてはかにこれを加へることとなつたのである。昭和二十五年は春から秋にかけてかうした仕事に忙殺されがちではあつたが、日々に仕事のかどつて行くのが楽しく、わたくしたちにとつては忘れえない思ひ出の一つとなつた。事務會計の一切は佐伯富氏、編輯は藤枝

氏とわたくし、宮崎、田村兩博士がこれらを重事されたのである。さらにいろいろの實際方面にわたつて、つねに學術書の作製について細心の注意と新鮮な感覺の所有者である齋藤菊太郎氏が、すゝんでこれに擔當協力された勞を没することはない。

載收論文はすべて四十三編、もちろん執筆者の大部分は先生の授業門下生であり、その他、先生と平生より交友の厚かつた同學諸師に及んでゐる。後者は從來の慣例上、先生より年齡的に後輩に當る方々である。しかもそのうちには、岡崎博士のごとくこの出版をみずして他界された方がゐるのは、何としても遺憾の極みであつた。内容は東洋史學の各種の部門にわたつてをり、すべてが重厚な實證的研究である。あの戰爭のさなかにありながら、時局に對する便乗や追隨は一向にみられない。この冷靜な態度こそ東洋史學の強さであつて、戦後における一部學者の動搖をよそに、かりした實證的な研究は依然微動だもせずして續けられてゐるのである。東洋學がわが國の代表的な學問として、國際的な信用を勝ちえてきた理由はここにあるのであり、國境をこえた學問による結ばれが世界平和に寄與した例は決して少くない。本書のごときは、さゝやかながらさうした役割を演ずる一例として取上げられるべきものであらう。しかし本書を手にするたびに、この十年間における世界學界の進歩の著しいことをつくづくと思はざるをえない。事實、戰中戦後の長い間、諸外國の狀態に對して目をおぼはれてゐたわが學界が、いよいよ自らを

謙虚にして進んで諸國に協力を求むべき立場にあることは勿論である。

(日比野丈夫)